

「慈悲の心」

鳥取県 法城寺住職 金田道一

ほうじょうじ

かねだどういつ

私の母は、亡くなるまで大きな病気もせず健康な人でした。しかし、七十歳になる少し前に病気になり入院しました。七ヶ月に及ぶ入院中、まったく泣き言を言わず頑張っていました。闘病の甲斐もなく亡くなってしまいました。治療に励み、老後を楽しもうと思っていた母を思うと、さぞかし無念だったろうと思います。

入院中、母の姿から、曹洞宗の大切な教えの中に示されている「布施、愛語、利行、同事」という、四つの教えを感じるようになりました。

「布施」とは、物や心を施すこと、

「愛語」とは やさしい声かけをすること、

「利行」とは、お互いを助け合うこと、

「同事」とは、お互いの心を同じくすることです。

たとえば、母は入院中同じ部屋の患者さんと、お腹がすいた時には、互いの差し入れをみんなで分け合い、喜びあって食べていました。また検査の結果が良いと自他問わず喜び合い、あまり変化がなければ必ず良くなると励ましていました。それからこんなことも、ありました。患者仲間が ベッドから体を起こすのが難しそうだとその人を支え、辛そうにしているときには遠慮し、さりげなく相手を気遣っていました。そして患者仲間が退院すると、母は少しでも早く健康な体を取り戻すため、さらに 治療に励み過ごしていました。

このような母の行いには、人を思いやる「慈悲の心」が 根底にあったのではないかと思えます。人はこの世に生を受け、時至れば、亡くなって行くのはこの世の常です。しかし、人と接している一瞬一瞬を大切にし、喜びや悲しみを周りの方と「慈悲の心」を同じくして行動することによって、皆が幸せに暮らせると思うのです。人と人との関係が希薄になりつつある世の中ですが、お釈迦様が示された「慈悲の心」を、大切にしたいものです。